

2023. 1. 1. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書13章22～30節
『質と量』

牧師の息子であった友人が、まだ幼かった頃、教会学校で「狭い門から入れ」と聞かされて狭いところばかりを選んで通っていたそうです。そしたらある時、塀と壁に挟まれて動けなくなってしまう、泣いているところを助けられてこっぴどく叱られたと言っていました。

本日の記事は、イエスが教えを宣べながら、町々を巡りエルサレムへの旅を続けられるという「旅行備忘録」のひとつとして途上で起こった物語という形で編集されています。ここでは、ユダヤ人は神の国に入れず、反対に彼らが忌み嫌っていた異邦人がそれにとって替わるというルカの救いの神学的特徴が際立つ物語となっています。

この箇所はマタイが7;13-14、22-23、8;11-12、19;30、25;10-12という具合に分散して記していますが、ルカは本日の箇所にワンパックに納まるように加工しています。共にQ資料を基にしています。

より原文に近いマタイは7;13-14の中で、狭い門から入る道と広い門から入る道の2つの道を用意していますが、ルカでは「狭い戸口」のみに集約しています。当時のユダヤ教の考え方には狭い門と広い門という2つがありました。これは慣習や制度という律法を遵守する回数を増やせば増やすほど救いの道に至る狭い門をくぐれるという「量」に由来する思想でした。積み重ねた努力の量が多いほど報いられるということです。

ところがルカはこういった「量」優先の考えを真っ向から否定しました。ルカの記す「狭い戸口」とはイエスのエルサレムへの旅という形に変容させたのです。つまり十字架という苦難と死という狭い戸口を通過しての復活という道なのです。そして、こんな道はユダヤ教徒や多くのユダヤ人キリスト者にはどうも受け入れられないものでした。なぜなら、初代教会は差別や貧しさとの闘いと寄り添いを通して自らを変えて行こうとする者たちの集まりだったからです。

「救われる者は少ないのでしょうか」という問いから推察出来るように、ユダヤ人キリスト者たちにとっては救いの人数が関心事だったのです。ユダヤ教と同じように多くの徳を積んで、量を増やして救われようという議論が盛んに交わされたといえます。

しかし、イエスは「お前たちがどこの者か知らない」(25,27)という厳しい拒否の言葉をもって「量」ではなく、自らの変革、つまり「悔い改め」という「わたし」の「質」を問うのです。

このことを分かり易く描くためにルカは 23 章の十字架のくだりで次の様に記します。

イエスと共に2人の犯罪人が十字架に架けられました。そのひとりには悔い改めて救いの言葉を死の間にイエスから与えられました。もうひとりには罪を告白せずにそのまま死にました。このことは、悔い改める者は救われ、そうでない者は滅びるということを示しているのでしょうか。いいえ、違います。十字架とは、悔い改めるも、そうでないも「同じであること」を示しているのです。

わたしたちは、ともすれば悔い改めでさえ「量」の世界に追いやってしまいがちです。しかし、十字架が自分のそばに立つことをおぼえるだけで十分なのです。そこに「質」があるのです。